

何やあ、そんなのあかへんわあ

そばに、三人ほど女の子が来て、僕を冷たくにらんだ。そして、その子をなぐさめて、連れて行ってしまった。僕は、その気持ちに、今、やっとわかって来た。

もうひとつ、にぶい僕にはどうしようも出来なかったことがあった。それは、卒業式も押し留めた時だった。

あの頃の小学校の時の女の子達の顔が浮かんでくる。ある時、女の子が四人程、集まってきた。

その中で、一人、いつも、キャッキヤと明るい早口の女の子がいて、僕に、「ねえ、正直にゆうてえ。うちのうち、誰が好き？」と、僕に急に尋ねた。

僕は、「そんなん、しらんわあ。」と、言いかけたが、その時、その四人のなかで、すみにいた女の子に気付き、その子を僕はじっと見た。

その子も僕をじっと見ていた。

しばらく、黙って、僕がこまった顔していると、四人とも僕の目をのぞき込んで来た。僕は、とっさに、「皆、好きや！」と答えて、僕はその場を逃げた。

「何やあ、そんなのあかへんわ。ずるいわあ。」と、四人ともがっかりした口調だった。